



研究者名※	福田 恭子 FUKUDA Kyoko	学位※	博士(美学)
所属※	国際文化学部 国際文化学科	職名※	助教
連絡先	fukudaky@fc.jwu.ac.jp		
URL			
researchmap※	https://researchmap.jp/kyoko_fukuda		
研究分野※	芸術学、美術史		
研究キーワード※	西洋美術史、図像学		
共同研究・競争的資金等の研究課題	・ニコラ・プッサンの風景画研究: 歴史叙述のための「地誌的」風景の構築と受容(日本学術振興会 科学研究費助成事業 特別研究員奨励費、2022～2025年) ・17世紀ローマの「地誌的」風景画の制作とフランスにおける需要(日本学術振興会 科学研究費助成事業 若手研究、2025～2030年)		
社会貢献・産学官連携活動等			
受賞歴	美術史学会 平成30年度『美術史』論文賞		

研究領域	西洋美術史	(SDGs)
研究テーマ※	17世紀のフランス、イタリアの風景画研究——歴史を語る風景	
概要※ (概ね1000字以内) (写真・グラフ等自由)	【研究の背景・目的・内容】 西洋の美術史において、17世紀は風景画が飛躍的な発展を見せた時代であり、現実の景観に基づく地誌的な風景や想像の風景、あるいは双方の性質を併せ持つものまで、多様な風景が描かれてきた。特にローマでは、古代遺跡や近郊の自然、そしてそこで展開されてきた数々の歴史が画家たちの創意を刺激し、この都市を題材とした豊富な作例が存在している。中でも、フランス人画家ニコラ・プッサンとロレーヌ出身のクロード・ロランは、ローマに取材した風景画作品で高く評価された。本研究では、これらの画家の作品を中心に、風景画が描かれた目的とその需要について考える。とりわけ注目するのは、風景画に描かれた地誌的なモチーフが、その土地ゆかりの歴史を叙述する役割を担っている点であり、その知的な性質が同時代の人々に好まれた可能性である。 【応用例、研究の展望】 特定の土地を対象とした「地誌的」な風景画は、グランド・ツアーの隆盛も手伝い、18世紀以降にさらなる発展を見せていく。本研究のテーマと趣旨は17世紀に限らず、時代や地域を超えて応用できるものである。 【研究方法の特色】 風景画における歴史叙述を考える点に本研究の特色はある。知的な作品が好まれる傾向にあった時代において、風景画という絵画ジャンルにおいてさえも、知識を要求するようなイメージが生み出されていた事実は、17世紀の風景画制作と需要を考える上でも新たな視点をもたらす可能性がある。	
本研究関連特許・論文等	・「ニコラ・プッサン《足を洗う女のいる風景》とミシェル・パサール: 古代ローマ、ウェラブルムの風景」『美術史』(美術史学会会誌)第184冊、2018年、266-281頁。 ・「ニコラ・プッサン作《ニュサのニンフに預けられる幼いバッコス、ナルキッソスとエコーの死(バッコスの誕生)》: 物語の場と叙述の伝統、寓意」『美学』(美学学会会誌)264号、2024年、61-72頁。	
共同研究・外部機関との連携への期待		